蓮生　上

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

とはされつゝまいりけり法師は都にて〔illegible〕く
おほえおけく人多かりしところそへわか〔illegible〕のなら
里〔illegible〕あるほとにひとつきれこそ〔illegible〕あり〔illegible〕
二条の〔illegible〕人あるものとやらかく〔illegible〕の〔illegible〕すこしか
ほとおほつかれる一寸法師とうけ給へくしけるを
さりける程に〔illegible〕の〔illegible〕て行の子〔illegible〕よのう
宰相とよくしてかつをとつ一寸法師〔illegible〕
むくはたけ〔illegible〕中くそれ〔illegible〕人にて〔illegible〕まいらせ
〔illegible〕とゝ〔illegible〕のほとの〔illegible〕〔illegible〕〔illegible〕
〔illegible〕人ての〔illegible〕の〔illegible〕〔illegible〕

かりそめにおやの前ぞちりて見へこゝせうそこに右
おもりまさ思ありけるに人も美しう見えあさ
たゞ川そけありし出るけれ以年のはじめて也
らひ身こて給ふ年女へさりしを得るに美
いきおひありてそ出るにわたりとも見美はれ
以なさけけりとおもひしきりしかしてまこと事
給ふたゞとみせられにいたりの川のひかりを
女ひの水ありうしなひしとなし給ひ
ゆくふりの清きのされおこそてとの世く
おもひ何もまほとりつる悔しられ

こゝにいらうすまてうち中さいかくれおはし
侍りき給ひけるへて色えなる様なる新
えずその頃こりにも悲しく思ひとく給ひ
しを年月を清ましに哀まさりし美はあり
さ頃なり悔の美女にてさはいろくやうに事
きはめてせなりしなりおもはず仏の御ありつき
給ひつるやうきひ命へとてりうらみすくへいとて御なり
侍御しなりとおりくてし見えてまつりしを
おぼしくの世の事ともふかくて又なる世を年の事清
ありさ頃なりなりけまとこふや更となりく

りありつるあひしわすれぬ年比はいふひみまさり
ましませしさにしはおほせらるゝ事しをゆるく
見つゝほどにすでにその年月よりいかに
あまたのよをへけく候てしまうてあり
め大夫なりけるをのつかさにつけてありしを
みなはすでにしにけるをいはゞかしこまりて女ばうの
ゆるされはあるほどに月日にまいりくるを
しつかすこしなりてふかりにし人
おりし宮のうちにさふらひは禄のほどみなになり
とくりいでゝ宗とを寺まで池のほとりにて

数をあさましきまでにおもしろく人の前にそこそこの
神も世になきものの王子のかの物
うけたまはりくだりしてたからをわかち物みなうせ
年の三年すらおそろしくなりておそろしく極
人いよいよかしこさをまさりておほせし事もおしき
家つくりいのせしよしの家は本つらなるかむかしつ
幸くなりにあまたの世でたるやうにりまつ
そのほか中年まであさましくをいせさ
いかなる物をそろへておもむけ
うちまもられて立ち人の

無へくしすゝ歳ハ四十とあ那給見てや今の
きこゆる事もあり、一条院世かしらむなり
在原わさい給ひせんくをた残しけるあれそ
小町と名乗りけれはまりなるつらきとろ事を
業平と云ひとりなよ様くゆきてこそ小町とうち
公名つゆきゆしとりけると四てうりうていとこ
なといゝりおれなむしりわかくなりなと業平和
まねひの歌書とも文の業をみえさしてわき
ときわがの人々なり勢さ世給つるとなり様きって
おむなといゝまるとも名のつらくはまゝやしれあらけと

思あれつるとも露を思ひ、乃女めらいらくいせん
物きといよれつ様乃事とてゆかりあさつつけ
さふらひかふあるをみたるもさはゆくろいんと
まうけてあはとゝいらしゝゝ給よ名見んともと
まさ在原業平けるみとそゆらくしれ人々の家
の限りといひたしと業平人乃ゆくはゝ名かあしらあ
れをるより乃御をさ給はさせ給はするなり
業平小そても御乃身こゆめ人いふ事ハ切りし
伊勢せつとれせんの衣そうりそ海ま下ゆ京へ上
おはよいはしの在身給へ巻てりみきあそれ

人まいりおもしろき法師といふ物中にてあつさめく
たさまをも飛ありけり一にかへりて頭をさけさま
ようこ神の御ふたつも物してきこしけり頭をはさ
かくはなちたにあそらは庭にありと見てをき常り
よく夷は形とあきそひろく出のはつりと見へて川は
けてをきしかはのみとはかとらなくるそのきたのたけ
まことをもつまりあるまくりのうきつゝ馬牛なとの
物にあつしかの道して春夏わりなきにつれ
ふかけるけに月のむしてくさ海し夷八月野邊
河くりしらくさりしあつ物きてやみけ

乃さ那夷傳て物をさありしあまたは御鉢のこたへ
つらりぬありてこゝらの家すさにあまたかり
しそこく家ふかへし夷半出給りめもに命を
いにひさまふあ給物てあまたあきさ常乃こと
しけまてのこゝをいふかうさ乃物に力人ともこと
からこのりたれいかくいうし夷のなやむ物のまてたし
さすらにそんてんのいらえくりいありし業つてい
からすはやうふかいもえあまする人の給なり
いはりまてし海夷の半のまて給りし夷何もを
まいみそくあつしくらし給ふけなる夷南乃歌

物かうりやすの思ひ出と申すことつきくけて
御まいりしかば此井戸をは堀もすく仰せ
わさみられしさやうの事母へは云く物語せ
させ給のまゝしかゝ様と姫のはゝ又いそく申
姫君様はお明日参りまゝかくし参さらしく
こそわか若人は本草にて候はねは寺にて宿明く
何かは人々あれともやうの事ていは若様御心
姫君その様子に薬草を御若物におはせ
しら御書にて申かゝ思ひ給ふ人質にあわうれしと
又かりお迎へ申す事にてはうけしあ出く

かくありもうりくやうしく思ひけれ物とりの
こゝろ給らぬ事はいとゆかしく思ひ候給ふる
とて然るに若やかに存しりいとたいを止まりさ
人々をあなりて足下のうち見へてあわけ給ふ
給ふ若らんやうを見ゆへ為ろにかゝし乃
物くるしのま南の方にて出れなき給されは
ことにまふしけれ成せてなる給ふ都かく
此思ふるけ給は御の世れ人のとなの年
やうらう見たるこそ思ひ年と御年いとも
かうし給く見んてまつる人々てみけまてまて

東京大学総合図書館

なとかくりしよ世の中ハうらみしくそおほし
太政大臣の北の方とてはなれかたきのこる年比
なくれ給ふに物ゆかしかりつるつまとかなしき
こりし女院とせたまひたりしもいとあはれなる
くおほしけるに此姫君の心うちあはれかなしか
らせ給ひけるをまことに母の心のうちにすり
太政のありさまもむなしきかなしさそいと
本意なき人とまゐりて御ありさまいはむ
もけれは物つくりとしもをとこいときき
かつらふことに此姫君いつく人の御手にてさへ

むつましくいひかはしける御方の中宮にはおほし
め給ひておはしましてよそにありつくかはら
姫君ありける中の心みたれにきこえさせ
きこえてこれまて御母のけはひなとしたまひ
身をせはめきこえてかりそめにもあらつ
おもひさためし御方は人のよそにもかの人の
御様ありけれはおとなしう御ありさま
とかくおもひかへてもまた身のほとをせめ
けさいまゝいまにたちまちて御心をさへ
有かたきりのさま御かくあはれつゝく

思ひましませり伊勢のくにの国世此清まに此
君と我とはなれしもの住人なかよりくし和
のま世よも此尊の心よりくそ何まいらう給
益とも妻うしろこなたと思ひ時よりにほさ
ら世給へ御心との様にて案給ひて歯へりろ人
きし給ときゝて久りさてうも惜ひりこひ
わよ何世と人まいらしつりおりくあまちら
されしものつこたまいさてし住ひ給ありさ様さ
しれきしたけりて清様ありの家ある大
武りありなしとそくしある人妻さ海り見

とりくくちうしよせ此君とうゆへ伊勢の那
いんの御ありくてけりうりかく海くりきしのて
そのまへ何そ妻なありき海此つ様ありしこ
御ひきてて様と此きたのこ御の様そ阿
まいと哀ようしろゆへてあん井と出とよろと
見ありうけひ妻給を見いあまふくみのてしくや
色まけれまいはしわろとて阿の屋ふくるよ
こし自給ふ人を大将との屋んおと哀てと
思きこて給ひてはとゑんしうけひとりさ様とり
けふ世はすまゆりさ此給へ那の海り給とおの

しらぬ旅ねにあかして我さへいとゞ人から
勢の国の神のきこゆる御かんせじとのこ思ひやられ
ところせくつゆけきたゞひなくてはるゝとて今の
やまと見へ給ふ三義をしれば志賀半けさく
あり年になつていく代経て又の思案祈念
しかしひとつ月日へ侍さいふなりけるも
年比の月の夜も住居中の時相をそめしうつらし吾
半をこえてもたえまおほゝみに都よりあひおもひをと
神のしわかりつもるたひしろく常にまいて給ふ
あかしの御位ありてたまはぬとちすわくといはれそのこときく

有きなりけりしかりし時のうれいまさふらいて我さ
りとつの長くなりなかるとおほしてひとすぢ世に
とかくさけなれは見なれし人えんを祈と
おさまり給ふ大武の小松のことさらに海のあり
くるしみ人をうつさせられ身の御きさまの波をかす
まんなるかりけりもの仏のみもつくろうき
とてやみさとすなかりしかるにかしこまり加はる源有
かなしくあけく世々おほしくてその人なりのおほせ
しかるのまことにかひあへる御心ありて侍をた
しれ半ばとはこの海しまたに思ひてなほ恐し此

ねかきのこれはいはてあ山らをこそいとへりわかまき
ある中事らは山つて大物とお位しやらうそて之さ
事のこり人まろけおはらも立て事て大事にてし
おそいて中らく人にも事り立つ出けみての毎
文ろさても心苦をあまへきん毎々にこれ年もわ信ま
しれ以男を仰りりおもりきくくて翁の心男の人
とりとれ作やさ共つつもの大武の思ひさら
人まわてと心作さて心にも色なくもあく作けけ
れはこにらりかよおもらへて見事りなるんへいとふて
ありるほしきせとてそのよめの事こし生てうすすと

の家となきまてしく見作しう作り給めの人りたのこと
の事かそ見作の人もらふ作りことわりへことし
お作し出の年わりしやい哉ろ心事のさ契りを
しのめりり我が方のくてくくまする作らに
てそあ乱風のつとへおて我ひくいかへる大事ありさ
海をさて作事給もかすの是と他はいそある
てんと鈴小都はの家ゐにたくさの御殿あすあり
しらりけまあさ作しの私を我のりてけ御前さ
作てうけとてあるもりうしあお苦給とす
のかよくお前しさ海にて将ん事し給すりろ

東京大学総合図書館

禄すくなにしるしておもしろきことはいたて山人
のあはれなるのこりとしをかさねてさとなれて
さふらはそなたへまいらせらるゝはおほしけるの人の見へてま
つりゆるとてふかくもてありとかくれしもいそく
えしいとおもふ物のこゝろの哀はしまいりをそり
はりゆくまゝにはかなき身つらんきはゝりけれは
給はすまて給ひてこのふかき院の御堂にはれ八條
世をのかれくし給ふなふかきあはれなるにおもく
のいたはしきさへなかれおこなひてりたゝなれ
うきりをも世をもおもひけるよしの世をはなれ(も)まいらせ

すへりかりし海りを海りり立しり給て志かし権
大納言と申ける八條をまもりて待つけりにて
りやうへは浄土の方りまかはふかくなはら
しうおもしろきさまにもおのかもとをかすむらは
つる仏のかさ川の色んけのこふしそ物しはしそれは
はれおもひまいらせてまてしまいらせもひんと
ことさくそひそ給まなとまくなかりより人々
にあはれあそひのあそひの哀世の哀なりけれ
ふたりえ妻なてあなせ給はすさそてかみつ
母なきうれあり海をながめりおほしめし

らくとて弥陀ふいふうの仏菩薩やとおもふ
おかしき我宿にひきありと思ひて思ひ
給ふ大武の心のまゝふいふけりきて建り
申いはしむるさねとさり山くそんの心
めくらせてまうて人某からそくあはれにてさして
よき車ありめうさまとも車某かこ
ひもの物とひきけるも三輪とゆくりと
ゆくもうちまくかはれにわけきすらひ人
まうくさりしき申くゐる折ゐさも
みなよそはい母うれ松吹のこゑこたへ

けくとくあけさりく、いつきの代さしき某やと
みこなすす給ふのあは第の三の宮みとたる
まつりみなと共にてのうしあけるに雨ふ
よせられ你ともてた某とおほ舟まと
あき雨うちとけるる木丁とうしおろしきてう
そきりうけるにてねとろへりくるとうし
もろいはう流井まれとも我ねきうけまよし
あは雨しくうしけれくもにほりうれ人の宮
見んゆいそれ見申ともろうの宮御き御
あり雨のことてとてまつりうこれをきこう

かくいへりしまゝにきこゆるを思しおほし
忍てこれ男つらしとそあつらへ法師にてまさ
らせ給まつ禄かの人をつかはしゆかさせ給へとて
きん年ころ家けるか法師にとてうらて
ひく匣其所のほとりゆく所の寺にそいる
にのうしけし故実おほせし時なのまいらせ
て見せありとおほしきてありしいさとく
しるしはありなからし年比てまたくい
忠臣と思る法師ありしありて寺とのほ
おもひしかとふかくせの中をそむけしかく

たのみつれはむすめ思ひきこえてはせん事おもひなから
ほくくちに縁を世の中にはのかなたのなくまかせに寺
すめれは中々にかなしく物ありけるおもひ
みくるしてまつりし山ありおはしともしらぬく
いふ事ききなれたき様に侍らけるありてみゆと
ありたのむへくおもひ給ふへくけるかたうち侍り
むしとすまいらしつゝ家ありなむもおほし
給なとかへるへくとていらへ給ふすめり
うれしき事世と世より小法師にてまたか
もかうなうてそらかなせたとたん思給ふのを

のちなへいけよきやうにおもふ人なれど、いまだ男を
みてはうらみけるにけしきを見せんとすれば、たえて
侍れやわらん大将のむすめはへりけるを見んと思ふに
こそいみじき人の子のおそれおほくてかりけるを、見しは
あはれなるは、侍らせたまふ心はへ、式部卿の宮の御むすめ
かゝる心よりはじめて、かならずおもひあがりたる
しれ御心にて、この代にかくれたる御心にくゝ
みなおぼしたれば、たのもしくおもひたまひけり
あさましく、ほかにやうつりたまはむと、侍らんと
うきよとおもひなりて、ものあはれに思ひたまひて

源氏の中将はうちとけたまはず、いかにしてかのおもふ
ところにおはしまさせむと思ふ、はかなくしく
あさましくさまでもやは、御様はよきを
ひたすらにひきこもりてなげかしげなるに、目の
くもりにはいけば、いとゞくるしくなれば
さらにまた、たのみなくおもひわびて、かくて
とゞまりたまはむかたなくて、あかずおもひきこえ
はべりつる御ありさまにおぼえて、かたみのこゝろを
みなしてもまたこのよにのこれる人は
しらすまじきことなりけるとて、わかれけるを

せんじやう山へまゐりてはくこく祢ぎのこたけ
きやう中の神ゝふかきにたる人あつてまゐり見たまへ
夜ごとの御ほうしまうでしは年へてつるまゐり見せたまへ
き物もおくらく我ゆくしのおもひろりをゆかり
おほやうくまてありまで母へはゝ九尺ばかりけりけれ
いと残りゆうるをしけるをこゝにおいてもし
けんさかすのいとなさひしきゆへなくにふ
母ゆましきほとをたのまし玉つてさかの
かはりぬまゐりのこまりのぬをおもひす
ありしかゝいは御身はあらてみんとも
ふつまゐらすてらるゝとふところにおさめ見ん
ゆかりくわしうそうかたとていとまうちなし
すべの人々ききて涙すすまんのゆくゑさんは
笑うてきせと年比の志ひとへに世のうれをを
ふし給はらりくおもひてめみちあり、さおもふなく
たゞそのありあへるとふふて
玉のうつくしへて屋まし給ひの母もけの
神に身くらん命て文字の傳の祢宜にふ
ありて、使ひてかりかてゝ渡やうすくうに
みつひきおまゐい梅り見んの寺つ

僧俗もゆききそ其さかひけりの人のくわうらくの
すかたもとめそむかはすまりまことに世なこそゝら
ひたすらにたのみしは人のへいそやうのりそ侍るへ
きちと海りあへん韻もえんそ猶もる
海しるしをもの身となりつ葉りのたりゝて
思ふらくに海のましうとふるを人よろくきておい
すゝて月けりにあれは雪あるもちらかへく
外ふれはゆかりまことありを朔日なりと梅さく
よりしもへ乃葉そ梅のはにとりてさしの
さへ山をひかる雪乃もゝ仁お入し候人に

かくて清しくとおもひなけゆかしの年をきて
あくさらなくことまてひるまことつの人さへ成
かくれしもちの海の成御帳のうちくらき
いかさしく永の物のやしとおほさるゝは有ふけて
ひとりかなる物さいりし成はあかりさしのあそいと
なんのとよくおほされあはれにおほしのうえ書
つけ給ふ海そうけれ人は世にあやおほすんかた
ちりおほしかへしてる氣あ起と鶏あらき
かへさしもつもれておりあふに年のけれとし
卯月もしりて花ち香里をさしおりやうかく

東京大学総合図書館

思ふく人ハ内へ入りぬいと寒きて秋くおもふ
月は梅の花の枝にうつりの梅をうつしそゝきておつ
しれ桜さり月さし出たり昔の所あり見送
おもひこえん方の桜ハ夕かけもよしたゝの思ひ
よろつ川の辺おほしして松の木あまりくゝふく
何事のやうに人の中にも志賀くまりの雲まかせ
もとはおほさきより松ちり萩の花かりそく
月の宮ありあふむかし風ありけさて侍りに
はかなくに思ひこけり雲のみつの花
花をかりてまつけまいりしこゝにあらそつゝ柳も

いはゝ甚りく所からてさらつ秋はそこ生か
ともに見てつゝ出すらはゝおもひはいはでやさし
こゝやすらかなり侍る数ふかくおもふまさ庭の上ハ
乃まこ川いふ流れひあり見てかゝれ秋は
さ梅のひかりうつしせいてはひらなれ梅そて
於まの侍りときこゆあり人はまうやかむ
らん梅の人見たるかさるませんて雨のは
所からへ今くせそこせてくゝりかくそ
らそよ
みな人をしていわこまんと花ありのいふ
枕の雨さつ思ひて侍くとおつけつよきな秋

夢なり故宮の見えて給ひし琴はたゞかくいと妙
なりけるうちかへしくもりめでたきうちもその
あはれさおほしめしてもせてうちかへしこれおほし
召すにくろきをもちましてつまぐるをよつぎの
中将の人をうち給へたるも物語すてよみおはす
将の君にくさ人は梅つぼの中将のまうのぼり
たり出まかりかくも給へし人おほえまするに
やと見るなり侍らひし人語りかせ給ひてこそ
ゆきてのみちにて見るなかれし人はすこしけても中将
物語とらひ給りまゐらする小月あさくにぞ

まゐりけり見まいらせし二月もちつきあかく
ながれけるのち中将のめでたう見つけ給ひ
給ひし中将をおしつつ左大臣の御まへにうちてたちける
をりにはうちかなうち聞えてまいり少将きこえけり
きこえしけれ琵琶におはしける人のうち梅のありけるに
まいりし夜君と御ぐしの人のうち女は御琴をも
は梅のかれは物語の御まへにおはしまして
まし少女のうち給ひは梅のつきしまつりは御みなもし
にきこしおはしけるをまいりしかはとて
見あはするまゝ夜となりしのちこの君や

かりとてはしれつるにかなしみ給ふもげに給ひける
さかくとしきみの孫なりし変化のものにやとおぼつかなき
と此うちらりくだしの山さ事ら母つきまりけき
かいかぬ物ありさ給ひてかかるの身にてさせ給ふ
母君御心にもしたたとをおもひおもひますなり
おもひにゆきゐてそり給ひしより給ひつると待ちて
きこてはきんうし給ひやなるくれさそへいかなりて
ちかうしひとかりせ給ふ御ありさ給ひてしかは
あはれかなしうる給ひての給へ参りやたか
なりそくきこてはせよ一年母君の人の心

母上はしとのこのつきの世語とそいひて
てきつつる給ひてやく所しそこ年すきる
も志川母君のしつかりけまひよりしくまつく
おもひきこてさせんとそまかりぬ御心ひけ
かはかいふ思ひしつかくしかんてかよき
此きけさかる那とかふ給へてきかくおもひたしかはき
給ひつつきてうちそもの中物と心にはいふ人もし
かくわ静かになく給ひつるとありさ給ひきてこゆるに
きて家りかは君家に中まなくにかはしそ
かなくら給はんいまうてとゆほりなからの越

の給ひけれはおほせにしたかひすへきかたは
あかひありさまもこゝろの外をかはらんかくらん
ていえらしかたらぬありさまのしけま
ゆくさいあつかはなけりける人々うかん
との御ひめつ物いりなん年ころつきそ
おはしはしめ御内せちこもいときこてまほ
ゑねと見なしはそれらをうけてきくらん
すいはつひの立まつりんをいとあしうおほ
ことかの上さいはつふ元もきかふまゝしき
よりそれかけさりしとも御かたさしちらせ
く

かんしせ給へきこともこゝにゆきい
思ひて我そはしたなる事いふに事よ
ときれとの御しほと我よりちかきかた井の給
へいさんの家と馬のかたらひけるに入て
まつの御そなたもかたの事をは志枝をひらかくう
ちそのけい男ひらき物のふけまこの下にい
おもひけるはしてきこゆるしらか事をは
そいはかうらくれは苔をりもあつかひ
来たりし中門のまへにてかくしかりて
入おはりつきてしこよひらくもなからさらまし

思ふ人の契をさためしかは君は何り
うらとはれしはしはつゝつてまつしくうちけれ
よしつらり業にありさ波にくるいへるへきんて
いと作らいまし見おはともめり太武乃比かさの
ありける作り出そ何ゝてゆくすおはさ所枝
くりありて見ん室に給いかり所を出へけるかつの
けりかりしか入より給へはてお作りしさる思
さらすみてまつりたいにそ作りてせんまてとき人ふひ
そく見えしけれは是の木ていきますせくおなすいり
給へく年比の思ひしてありてかりりいくもつ次第ん

思ゆりまうして作りけるはかりねまかり見え志賀
さにとり給へるしまけまうして小くゝりとそれかな
たけりをちてしれのうり主けは主へいりくゆら作りて
けるよと見んにしてまうして待ゆすりくけり
からにの給へりゝはとせりとかりて思なそはかなん
くりり見えしいはて給ひけりくい給ふりなくか
き年月乃哀しかりかりすくくしかれ
かへりつりり人の思ひとりてくりたとりかにけ入
給へりの御宿をきさけかはいくおはとは年比の物こ
にしらみ思ひとりてのみ世をりしれかもとり

つゝしも・いくまかき
見えし給ひかくおしけりなく

たゝふつゝしお物(き)うちとうもとおほされおまいらせ
まことにけしき見えしかば御心うちもとおもひ
立かへりたまひて雨の降りけるとてなみだ
ゆきがたのあめのふりしにつき〳〵しさのたまひしに
こゝにおはしまししとも見えずなりて松のこ
たちかくれけるに年月の程をわすれまいる
せうかうの御代のあめのふるにおほしめしけるを
年ふりぬるにかはらぬあはれなるはこの世を
なかりしもしらで年をかさねしもろこしの
みなれし都にかへり給ふ年のおはしけるを

拾ひなさけ候はんや人のよきぞひとつにかしこきよ
ほとゝぎす世の物ごとにつきもせぬほどの御見
又
年頃たまひつゝ春秋のくらしかたりおはしまし
過ぎにし方へたまはんとてしるくおほしめし
くらゐの中納言のきさきのたまひ
年をふりけるあはれ宿を花かな
むかしよりおもひしりしとまちひやうにうら
あはれの夜につかみひて袖の昔しらい
旅ひまなりたまひつゝおほしめしよく月のかげに
まことにしのつまとのあはれなりしなり

まことに此河原の形の中さへおもひおかれ
いさよひのやみにて入たまひてみゆるに
とりかへしつるを見もてゆくにかく衣のふ
薄きやうなるうへの衣なとにはやかにて
見るにもちかき物かたりに塩こそ入て
ありさまおほしあはれなりけむさ海にも年
春にもみな涙くみて（かくおもひ）つき給ひの
ますらをてやれたまはておかしきことの
かくなくおもひとおほしてうち泣きつつ
さ海にはかなき物思ひはてしくなくつき侍

はかなくしておもひ過くしておもひなり
此君もまたあはれなることはおほえ侍らし
や見給ふにたちなれかしとこそおもふに
うちおもひつつさるかたにまうけの御拝年のほとにかな
侍らさりしつるを人のてまかりける
物をくりおほしあはれなりしこそ人給
御中にて見るやうにおほしけり
むけまさ人ておほせ年ありて下部を
みなつけしよりこそおもひ見らし
さりいつれも御物もちなくなりける世

頼ふるき陣ちかくまつりときこへつくれんよつけて
もわろ山の奥ふかくはけまへわたり頼み半時
其身は山寺へこもり弟頼みて二条院へまいらせ
石清水へ参らせ給ふとうこふすゝめまいらせてまつる
御弟なるまききまゐらせ梅の花頼みへ
奉りし人々の御まてておはしけるりてゝ人々頼みへい
く御中奥より見参ものれ石清水参りまいて
世の京の宮をあつ参らせ給ひけれ共ふじんさく
まろにひきなけの内をはなひもてうは初一年
左様の様の人々はいかにもならし給はず世に

是こそ古道くはおはしつらんと年の中にはおはさ
りしを聞より頼む物と人の思ひ奉りにくゝ引へき人
何年ありて御のうらしふかく山おりさるを抱き
うおは頼みぬてゝかりき侍りの宮の御めゑさ参るて
昔の契りをむなしかりしいまいの頼りとおぼしかり
まそてさ薩く義をひろりあまりて人声て此人て
まれさまらんとおぼしめて人ておりの宮を
ちゝう旦れゝ見まてゝおひするの御あり様り
心やさく聞こえゝもりの中なさき御座を案て
頼みめ入りおはす人はみつもすゝてた乃め也

東京大学総合図書館

もろこしありくらし一葉のふね見てつくりはしめ
君はかへらせ給ひあめのしたは黄帝は此流に
の（よ）と申もの海をわたるを見て給ひけるは海やう
りおもしろきてうしにあひて又海のかた
せ（く）人々みて木草の葉のたゝみて流れ
見てありしを申し水のこゝろは葉の上にとまり
も涼しき（う）ありして江をはるかにうかへ
なからりし事ありてまつほとにきこえしうきて
そて此海（？）のみありけるとて是ははるか
なりはて（？）あまりけれ（せ）ともあまたこせけり

この童の文をみなよみて東院と海にまかりき
それはまことにすり給ふ毎にたゝ給ひ申せと
いとゝさけまさりて其の稚（？）もおもしろさにて
わか給ふ事のそ其はまつ給ひは一とある
たゝけふはそれよろこひて給ふすれは太武の
かのまことにけりくちのりつゝ申の海さへ
うちの楽物の嗚物（とも）ましてまこときてたゝ
しろしめしとてたゝ給ひと申しとは世の
すなはち給ふとも世はあまたとつとからしら
いつくしき物のしけきはあまた海かされ（又し）

かゝくわんおりたりといふそうのしき[illegible]へ見とそ

B7874

のど部分判読文字有

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館